



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第126回 夫婦年齢差の推移：姉さん女房の増加

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。勸国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



#### 縮小する平均初婚年齢の男女差

晩婚化の指標として厚生労働省「人口動態統計」の平均初婚年齢の上昇を使う場合が多い。同指標の戦前からの長期推移を図1に掲げたが、戦後の平均初婚年齢は、男女それぞれ、戦後最低値の25.9歳、22.9歳から戦後最高値となった2019年の31.2歳、29.6歳へと5.3歳、6.7歳の上昇となっている。上昇テンポとしては、戦後はじまった上昇傾向が、2000年以降の15年間に加速し、2015年頃を境に横ばいに転じている。

男女の平均初婚年齢の差は、おおむね、夫婦の年齢差を反映していると考えられる。戦時中は結婚についても特

\*表示数字は2019~20年

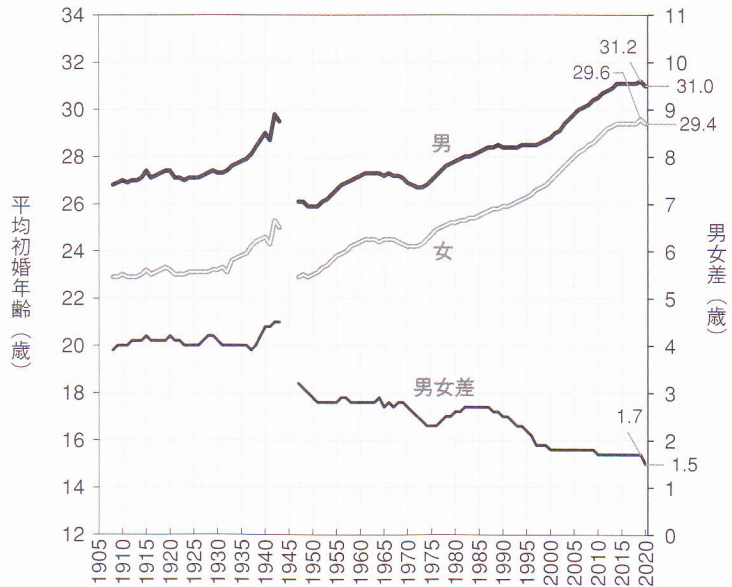


図1 平均初婚年齢とその男女差の長期推移

注) 婚姻の相手が再婚の場合を含む。四捨五入の関係から表示した男女の値と男女差は必ずしも一致していない。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

殊な状況にあったと考えられるのでその時期の動きを除いて推移をたどってみると、戦前から戦後にかけて男の平均初婚年齢が1歳ほど下がり、女のそれはあまり変わらなかったため、戦前は4歳程度だった差が戦後一気に3歳弱のレベルにまで低下した。

戦前から戦後にかけて平均初婚年齢が男だけ1歳低下した理由については、低下が一時期だけのものではなかったところを見ると、結婚が困難だった戦時中の反動というより、むしろ、家族の中で男子、特に長男を重視した戦前のイエ制度が男女平等を理念とする戦後憲法に反するものとして撤廃された影響が大きかろう。

平均初婚年齢の男女差は戦後しばらくほぼ横ばいの推移を示していたが、1987年から97年にかけて2歳以下へと急落し、その後は緩やかな低下傾向をたどり、2020年にはついに1.5歳と戦後直後の半分以下のレベルにまで低下している。夫婦の年齢差へのインパクトは、戦前から戦後にかけての制度変化より戦後を通じた長

い間の社会変化の方が大きかったとも言えよう。

なお、データの得られる最新年である2020年には前年と比較して平均初婚年齢は男女ともに0.2歳ずつ低下し、男女差も0.2歳縮小しているが、これはコロナ感染症が影響したやや特異な変動と考えられる。

## 増える姉さん女房

こうした平均初婚年齢の男女差の縮小は、日本社会における男女関係や夫婦関係の変容のあらわれと考えられるが、夫婦の年齢差の変化をより具体的に理解するため、以下では夫婦の年齢差区別の婚姻数の推移をたどってみよう。

初婚夫婦の年齢差区別の婚姻数について、図2では1970年からの50年間（半世紀）の変化を追った。

1970年、1995年、2020年という四半世紀毎の夫婦年齢差区別の婚姻数を比較してみると、まず、1970年には夫が3歳年上の婚姻が10.3万件と最も多かったが、1995年には夫婦

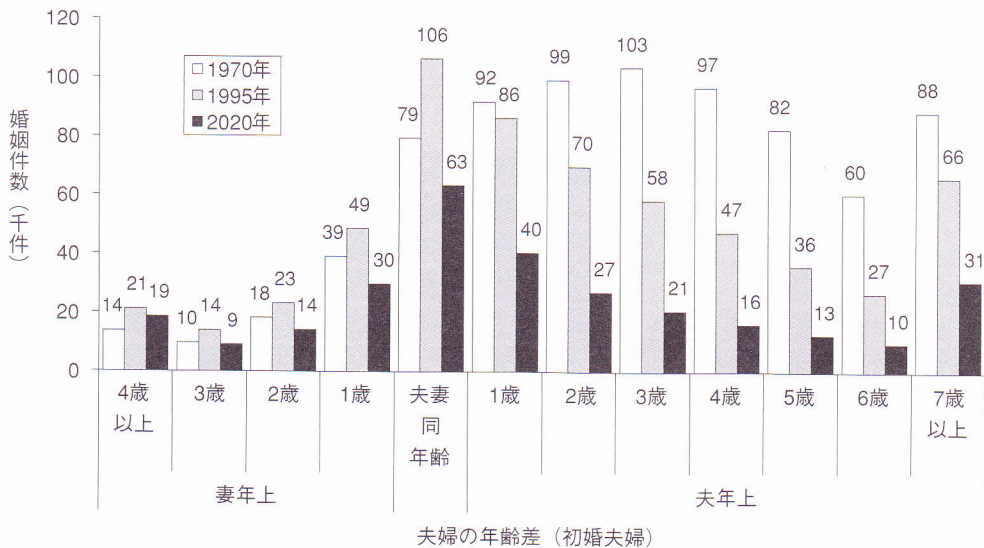


図2 夫婦の年齢差（初婚夫婦）別の婚姻数

注) 各年に同居し届け出たものについての集計である。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

同年齢が10.6万件で最多と大きく変化し、その間、妻年上の各区分と夫婦同年齢がすべて増加する一方で、夫年上の各区分はすべて減少していた。夫が妻より年上なのが当然といった状況は大きく変化したと言ってよい。

1995年から2020年にかけては、すべての区分で婚姻数が減少し、団塊ジュニアの世代(1971年～1975年生まれ)が結婚適齢期を過ぎ、結婚そのものが少なくなった状況を示している。各区分のパターンはあまり変化しておらず、婚姻数の多い順番が「①夫婦同年齢、②夫1歳年上、③夫2歳年上」から「①夫婦同年齢、②夫1歳年上、③妻1歳年上」へとやや姉さん女房よりにシフトした点が目立つ程度である。

次に、5年おきのデータを使い、これより大括りの区分の婚姻数構成比の変化を追ってみよう(図3)。

当初、妻年上は約10%、夫婦同年齢も約10%、合わせて約20%であったが、2020年には、妻年上が24.5%、夫婦同年齢が21.6%、合わせ

て46.1%と半数近くに達しており、この50年間に大きな構成比の変化があったことがうかがわれる。

変化が大きかった時期を見てみると、妻年上は1985年までは10～12%だったのが、2005年にかけて一気に二十数%と2倍に拡大しており、1980年代後半からバブルとその崩壊、及び失われた10年の時期を挟んで2000年代前半までの20年間の変化が非常に大きかったということが分かる。

こうした変化の背景には、見合い結婚が減って、恋愛結婚が多くなり、男女交際の中心が学校の同級生、職場の同期、友人の知り合いなどになってきているからであろう。実際、同年齢の夫婦の割合は増え続けている。

妻が年上の場合、妻が1歳年上のケースまでは早生まれ、遅生まれで解釈できるが、妻が3歳年上の件数も増えており、これについては、「草食男子」化の要因を想定せざるを得ないであろう。

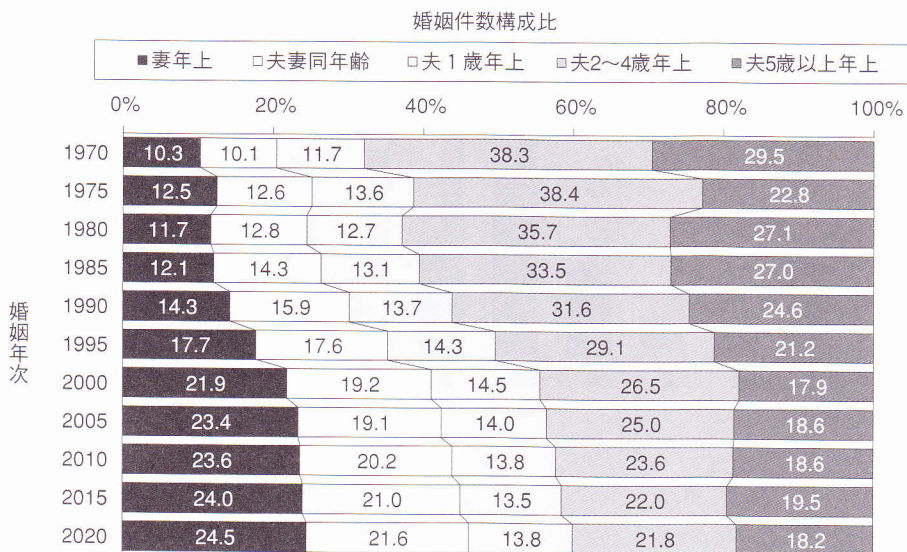


図3 夫婦年齢差別の婚姻数構成比の推移(初婚夫婦)

注・資料) 図2と同じ。

男女の精神年齢は、同一年齢であれば女性の方が上という社会通念が正しければ、妻年上（姉さん女房）、あるいは夫婦同年齢が半数近くになったということは、日本人の夫婦関係は、全体として、精神的には女性優位となったと考えることができる。

この他にも、女性の平均寿命の方が長いことを考え合わせると、死別後のひとり暮らし女性高齢者の増加の加速が見込まれるなど、今後も社会に様々な影響が生じてくるであろう。

夫婦関係の変容と草食系男子の果たす役割について小説家の金原ひとみは次のようにコメントしていた。「最近、若い夫婦を見てい

ると、仲の良い夫婦と仲の悪い夫婦、両極端に分かれているように感じる。仲の良い夫婦を観察していると、女性のタイプに一貫性はないのだが、男性は総じて草食系であることが分かる。（中略）細やかな気配りで配偶者を思いやるのは、かつては女性の役割だったが、会社でも家庭でも女性の支持がなければ生き残れない中、男にも思いやりや気遣いが求められるのだろう。今や草食男子は一つのモテジャンルのように語られているが、実際はこの世の中を生き抜く術として作られたスタイルなのかもしれない」（東京新聞 2010 年 10 月 14 日、本音のコラム「夫婦」）。

## 東西日本で多く、中部日本で少ない姉さん女房

最後に、姉さん女房が多い地域はどこかを示す全国マップを掲げた（図4）。年次は最新の都道府県別統計が得られる 2015 年である。

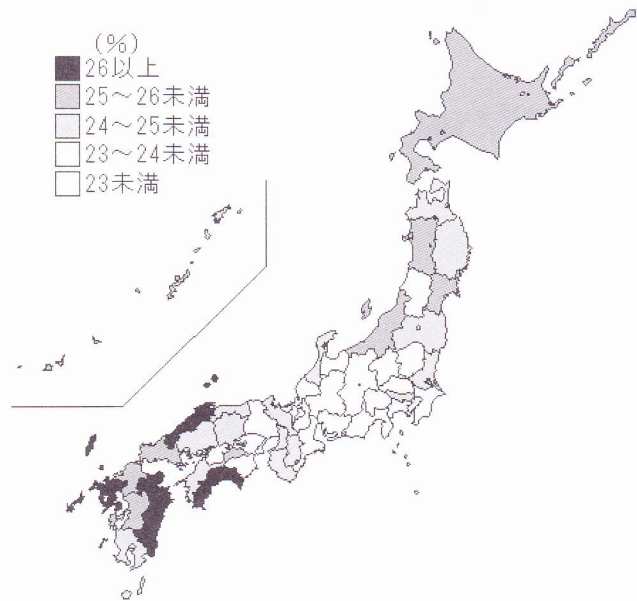


図4 姉さん女房比率の全国マップ (2015年)

注) 初婚夫婦の年齢差が妻年上の婚姻件数割合。都道府県は夫の住所地による。  
資料) 厚生労働省「婚姻に関する統計」(平成28年度人口動態調査特殊報告)

全国マップで明らかなように、姉さん女房比率は、九州・西中四国と北海道・東北という日本の東西両極で高く、中部日本で低くなっている。

全国1多いのは長崎の27.4%であり、宮崎の26.5%、島根の26.4%がこれに次いでいる。逆に全国1少ないのは岐阜の21.9%であり、愛知の22.5%がこれに次いでいる。

境界地域では隣接県でも大きく姉さん女房比率が異なる。高知県では26.1%と多いのに、隣の徳島県では22.6%とかなり少なくなる。同様に、新潟県と長野県では25.1%と22.9%という落差が生じている。文化的な境界がここにあるとも言えよう。

関東や関西などは中間的な比率となっており、大都市圏で姉さん女房が特に多いということはない。

こうした地域的な特徴を説明する要因については今後の解明が待たれよう。